

続「ある雪の旦に」飴色の列車にて

「今年も師走の最後までご苦労さんでした」

先月よりもいくらか分厚い現金袋を両手で受け取る工藤忠徳に、この日宇都宮から現場に来た上長の阿久津は周りの視線がないのをちらりと気遣うとそうそう、ふと思い出したんだけど、という風にさりげなく付け加えた。

「心ばかりだけれど、ボーナスはずんどいたからよ、お前の言ってた…なんつったっけ、玉生の娘さんを大切に」

「本当に阿久津さんにはお世話になります。実は僕も玲子さんを食事にでも連れて行こうかと」

「まあ、お前が何に使おうと俺は知らんがよ！ほらほら、行った行った、お前はそこいらのでれすけとは出来が違うんだ。来年もよろしくな！」

下野船生から北の山間に入った天上沢の臨時伐採工として九州の炭鉱の仕事から移って栃木に来た忠徳は今は高原山鉦山簡易軌道の廃止された旧釜ノ沢鉦山線をダム建設のために改築する現場で腕を振るっていた。「冬は雪が降って仕事にならんから帰されるかと思っていたらよう、このからっからのお天道様だ。たまないよなあ」方々からやって来た臨時工たちが愚痴るのを尻目に黙々と働く忠徳に対し、当初口の悪い同僚の何人かは「ちえ、厭味だよなあ」と疎んじていたが、それも彼が土木施工管理の資格を得て第二工区の区長に就く頃には、少なくとも表立って彼の事を悪くいう輩はいなくなっていたのだった。それはあるいは彼の凛とした姿勢の良さや真っ直ぐに相手を見据える眼差しに込められた静かな力のようなものが、あたかも剣道の竹刀をずっと中段の構えで鳩尾の前に下ろしたような、そこに抗っては勝てぬと人に思わせる落ち着きを伴っていたことも影響しているのかもしれない。

路盤の造成工事が続く山腹からどうにか上り下りできるよう山肌を削って作られた急ごしらえの踏み段を降りて行くと、廃止された釜ノ沢鉦山線の錆びついたレールが民家もまばらな山間の集落に真冬の午後の斜めの陽を浴びてぼんやり浮かんで見える。線路はくねくねと曲がる荒川に沿ってそこそこに急な曲線を伴って敷かれているが、その荒川もこの冬は水量が少ない。忠徳は黄色い陽が山の端に近づくのを見ながら、この先ダム湖に沈むのであろうトロコ跡に沿って歩を進めた。

「やあ工藤さん、今年もご苦労様でした！」第一工区との境まで来ると、工事を終えて一杯やっていたらしい第一工区長の佐藤が手を振って来た。

「第二は大変でしょう、何しろ線路全て新設ですからね！」

「ご苦労様です。ええ確かに、特にあの土砂が出る所は難儀ですね」

忠徳も笑顔で返した。東古屋(ひがしこや)で高原山鉦山簡易軌道の本線から分岐する旧釜ノ沢鉦山線は、これから始まる西荒川ダムを控えてダム建築資材の運搬線として今まさに再出発しようとしていた。全長千五百米あまりの工区内、従来線の傷んだ部分を補修して東古屋での本線との接続部分をも改良するのが西側の第一工区、そしてダム湖に沈む予定の部分全てを付け替えて新設路線を建設するのが東側の第二工区だ。特に第二工区の中程には荒川に向かって沢筋が合流する場所があり、ここは大雨の度に大量の土砂が流れ込むため橋を架けるのも一苦労、

ダム湖に沈む高さを回避して山際にトロッコ路線を移設する上での最大の難所となっていた。

佐藤が続ける。「会社もどうしてわざわざ沢が下りて来る北側に通そうとしたものかね。荒川の南の側に通せば良いだろうに」

「いや佐藤さん、南側は南側であまりに急斜面で…あそこに軌道を通そうとしたらトンネル工事になってしまいますよ。ダム建設のための仮線なら、たとえ土砂で崩れようと仮説の木橋でも組んで沢を渡らせた方が安く済みますから」

「なるほど。いやいや工藤さんはお若いのに恐れ入ったわ。今日は遅くても大丈夫なら、あんたも一杯やって行かない」

「有難うございます、でも今日は生憎で…。早く帰らねばならぬので」

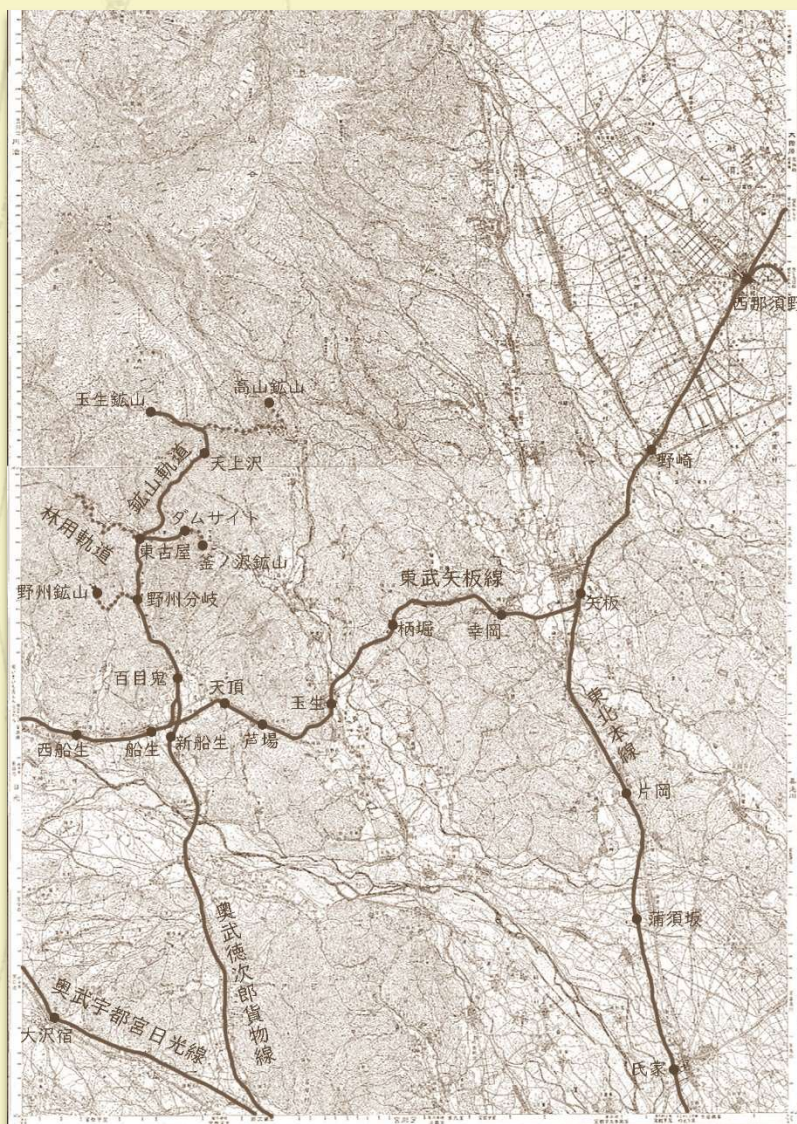
「あ、さてはあれだな？玉生の玲子さんかい。そりゃ早く帰らにやだな。それじゃまた来年！気をつけてな！」

忠徳が東古屋の停車場まで歩いて来ると、駅構内にはすでに黒光りする真新しいレールが何本も敷かれ、七六二耗のナローゲージながら立派な構内側線が出来上がっていた。

「立派な停車場になったものだなあ…」

忠徳はふと、初めてこの栃木県北の山中に分け入るトロッコに乗った時のことを思い出していた。しんと雪の降りしきる真っ白な山道を右に左にと揺さぶられながら小さなトロッコ列車で登った先、ぱっと視界が開けると同時に軒を長く張り出した古びた農家が数件。後ろの客車には真っ直ぐな目をした工員姿の忠徳と、薄緑色の品の良い羽織に深紅の髪留めが鮮やかなほっそりとした娘と。煤けたコッペルのキャブからちらりちらりと後ろを伺っていた機関士の好奇の目を今思い出すに、伐採地の休みを知らずに山へ向かってしまった自分と、行く先を間違っただら山行きの特快に乗ってしまった玲子を思い出し、笑みを禁じ得ないのだった。あの時には荒れ放題だった東古屋の駅構内もしっかり整備され、ここだけ見ているとダムへの分岐線もいつ稼働してもおかしくなさそうである。

里の外れに設けられた軽便駅でしばらく待っていると、遠くから小さなドラフト音が小刻みに近づき、天上沢から下りて来たトロッコ列車が木陰からぬっと現れた。西日の当たらぬ山陰の停車場に、コッペルの掲げるカンテラの灯が



すでに眩い。無蓋の客車が繋がるオンボロ列車の、一番後ろにようやく空いている座席を見つけ忠徳も身を屈めて乗り込む。第二工区から東古屋までは陽が当たる道を歩いて来られるが、東古屋から百目鬼(どうめき)までのトロツコはひたすら木々の間をすり抜けて行く暗がりの径。山男達を満載してガタゴトと左右に前後に揺れる列車は脆弱な軌道を脱線しないように、急な坂道を転がり落ちぬように、慎重に歩を進めて行くようだった。一番前のコッペルが小刻みに体を揺らしている。一面真っ白な雪に包まれていたあの日も、確かこの老機関車はこうして自分と玲子を山へ連れ去って行ったのだっけ…忠徳はふと暗く沈む森の景色の中に温かなものを感じ、鞆の奥に大切に忍ばせたパンパンに詰まった給料袋に、その外からそっと触れたのだった。

トロツコの終着駅である百目鬼には午後三時過ぎの到着。すでに夕方の趣を湛える黄色い陽が赤茶けた枯田を一層赤く映してその暖かな色合いが真冬の北関東の空っ風の中に安らぎを与えていた。忠徳はトロツコ客車から飛び降りるとホームと駅舎のぐるりを見回した。そして木組みの駅舎の向こう、車がやっと三、四台止まれるかという駅前広場を囲んで植えられた桜の若木の一つの傍、山陰に遮られる広場の中ちょうどぎりぎり陽の当たっている一角に、白地に緋色の織が入った外向けの着物を着てすつとこちらを見つめて立つ勅使河原玲子の姿を認めたのだった。

「ご苦労様でした、玉生の伯母が、今日は遅くまで楽しんでいらっしゃって！」頬にうっすら紅を加え、いつに増して弾んだ表情の玲子はいかにも力を入れておめかしをしたという風なのがまた愛らしかった。髪に挿した黄色のトンぼ玉の串も、少し前に忠徳が贈ったものであった。

「玲子さん、遅くまでと言ったって、百目鬼でも船生でも、ご飯どころは八時には店じまいですよ？第一、午後七時の船生の汽車を逃したら、玉生までも帰れないでしょう？」忠徳の年末休みを待ちわびていた気持ちを隠せない玲子を、忠徳は敢えてからかってみたかった。

「ですから、今晚は宇都宮の母の生家の方に泊って来たらどうなのって。弟たちも会いたがっているし、伯母も今年は店じまいだからって、気にせず忠徳さんのところにもご挨拶に伺いなさいって。それから、忠徳さんにはくれぐれもよろしくと伯母が申しおりましたわ」

「なんだそういうことなら、宇都宮の方でお食事など、どうですか？」

「ええ、参りましょう！」

そうと決まれば話は早かった。山から下りて来た男たちが集う百目鬼駅の砂利敷きのホーム。中にはほんの二、三人、鉦山列車に紛れ込んで今市、宇都宮方面に出ようという地元の利用客もあったが、その中でも白に緋が差す着物に小さな細面の顔がどこか儂げな玲子の姿にはそこだけスポットライトが当たったように引き立つものがあった。

「素敵なお着物ですね」

伏し目がちな玲子を真っ直ぐ見据えて忠徳が続けた。

「有難う御座います。母が若い頃の晴れ着で。空襲で残ったのは何着もなかったそうなのですけれど…」

玲子の服装を素直に美しいと思って口にした忠徳は刹那、繋げる言葉を失った。玲子の母はというと長患いの末に玲子が十の時に岡本の療養所でその一生を終えたという話は以前に聞いたことがあった。戦後の混乱期でもあり、

医療物資も満足に手に入らなかった時代。玲子の母が逝った昭和二十五年には初めて日本に結核の特効薬であるジヒドロストレプトマイシンが輸入されている。もう少し早く玲子の母に届いていればあるいは…。「そうしたら自分は玲子さんには出会えていなかったかもしれないな」ふと湧いて来た想念に忠徳ははっとした。何という下賤な思いに駆られているのだろう、玲子が親を失って玉生の伯母の許に身を寄せなければあの日山へ向かうトロッコで出会うこともなかったなどと、そんな我儘な発想ができる自分を忠徳は恐れた。そして、母の病のことは話に聞いていたが、空襲をも経験したという話は初めてだったのだ。

「そうすると、玲子さんも小さい頃空襲を経験されて？」

「いえ、私達は佐野の父方縁者のもとに疎開しておりましたから無事で。着物だけは宇都宮の家にありましたので、そちらは何度も焼かれたようで…」

「お父様もお母様も、本当にご苦労なさったんですね。僕達の世代がしっかり幸せな日本を作って行かないと…」

言葉を継ぐ忠徳に、こくりと頷いた玲子がずっと寄り添った。

「そうね、私たちが幸せにならないと！」

「私たち」にわずかながら力が込められているのが、身を寄せる玲子の体温とともに忠徳に伝わったその瞬間、ビーツと大きなブザーが鳴り響いた。

「奥武線徳次郎(とくじら)行き、徳次郎行き列車入線ー！列車入線ー！！」高原山鉾山簡易軌道の駅員が声を張り上げる。百目鬼駅は一応奥武線と高原山鉾山簡易軌道の共同管理駅ということになっているが、事実上駅を仕切っているのは鉾山簡易軌道の職員で奥武線の切符は車内で発券される。そもそも乗車客の大半は定期券を持っている鉾山、林業関係者であるため、発券の仕事というのもほとんどないに等しいのであった。

小型タンクが鉄道省払い下げのダブルルーフの客車を三両引っ張って砂利敷きのホームに静々と停車する。忠徳は玲子の手を引き傾いたステップを上がり真ん中の車両へと乗り込んだ。隅々までニス塗り込まれた餡色の車内にはすでにオレンジ色の灯がうっすらともっている。木枠に緑色のモケットの張られた座席に並んで腰掛けると、玲子が切り出した。

「忠徳さんの故郷って、素敵なところ？」

「故郷かあ…。僕は東京の郊外の出身ですから、山や海があって、というわけではないですよ。でも深大寺とか、川を渡った向かい、稲田の堤とか、綺麗な場所は多かったですね。まあ大きくなってからはこう見えても九州の炭鉱で荒くれ仕事をしてた訳ですから、多摩の思い出はほんの小さな頃のものですけれどね」

シュッシュツと小気味良いドラフト音が近づき、くろがねの一塊が通り過ぎるとともに建付けの悪い窓ガラスがビシビシと振動し、窓一面にふわっと蒸気が広がった。逆機の蒸機が客車の脇をすり抜けせわしく機回しされていく。

「稲田の堤って？」

「多摩川沿いに築かれた土手沿いに桜並木がありましてね、春になると我が世を謳歌するように咲き誇るんです。故郷の調布から渡船がありますから、それで渡るとすぐで。対岸の川崎市、橘樹の地にも鉄道が走っていて、そちらにも稲田の堤に因んだ駅名の駐車場があるようですね」

「素敵、いつか連れて行って頂きたいわ」こうべを忠徳の方に傾けてほほ笑む玲子に、忠徳は「まあ何もないところですけれどね」と笑い返した。

ポヒー！と軽い汽笛が響くと、続いてドレーンから盛大に蒸気が吹き出され、前の方から炭の臭いの混じった煙が漂ってくる。ゴトリ、と振動が伝わると、すでに陽も落ち青みを帯び始めた窓の外の景色がゆっくりと左へと流れ始めた。百目鬼の駅を出て東武線に繋がる連絡線を右側に分かつと、小型客車三連を繋げた列車は板橋の集落の灯を左に見ながら築堤をゆっくりと登って行く。一軒、また一軒と灯がともし煙突から柔らかな煙の立つ家々を見下ろすと、あああの家々でも夕餉の支度が始まる頃だろうかと思徳は想像した。「綺麗ね、あの一軒一軒に暮らしがあって」玲子が云う。「僕も、今全く同じことを考えていました。街道に沿って並ぶ家々の一つ一つに、幸せがあるんだなって」

列車は暮れ行く街道と東武矢板線の単線の線路を大きな築堤で跨ぐと、間もなく新船生の仮乗降場に到着する。ここからも東武線から乗り換えて来たと思しき客がどっかと乗り込んできた。忠徳たちの目の前の席に、歳の程は四十半ばを超えたくらいだろうか、恰幅の良いスリーピースのスーツを来て頭髪をしっかりと固めた男性が腰掛けて来た。

「こちら、よろしいかな」向かいに腰掛けると物珍しそうに二人を眺めている。「いやいやこれは失礼、こんな鉱山、林業の専用列車に女性の方は珍しいもので。失礼ですがご夫婦か何かで？」

「あ、いや、一応そういうものでは…」言いよどむ忠徳に、玲子がそっと添えた。「いえ、まだ、なのですが」

「まだ！？あ、そうかそうか、はっはっは。これは失敬、失敬。まだ、ってことはその内についてということかな？」

玲子があっと顔を赤らめる。

「切符、定期券お持ちでない方はどうぞ」がらりと戸を開けて車掌が近づいて来た。忠徳が呼び止めて玲子の分の切符を買い求める。

「そちらのお兄さんはどんなお仕事で？」切符を玲子に渡す忠徳に、スーツの紳士が再び問いかけた。

「この先の荒川にダムを建設するので、その資材運搬鉄道を造る現場監督をやっているんです」

「ほう…若いのに立派なものだ。ダムと言われたが、地元の農家さんたちはどうされている？」

「はい、大切な土地を失うことになりまますからね…。本来なら地元への補償はダムの工事会社が行うことになっているのですが、我々はそれに先行して鉄道を敷いてダム工事を知らせることになりますから、一軒一軒伺って土地の想い出など拝聴しております。我々にできるのはそれくらいしかないのですが…」

ふむふむと真剣に聞いているスーツの紳士の頬がぱっと真っ赤に照らされた。カタタン、カタタン…急に車輪の

音がけたたましくなり列車は鬼怒川を渡る鉄橋に差し掛かっていた。開けた河川敷の向こうから名残の夕陽が仄明るく車内に注いでいる。

「東古屋、と申しましたかな、あちらは。私共から見たら山の奥のちっぽけな集落に思えても、その土地土地の歴史があるんですからねえ。栃木の北部と言えば、少し奥に、平家の落人村もありましたでしょう？」

「え!？」

「ご存じない?川治の奥、湯西川は平家の落人が外の目を避けるように逃げ延びた土地だと伝わっておりますよ。それに今市から会津に抜ける街道沿いは戊辰の際に幕府の関係者が敗走していったとも云いますから。栃木県の北部に広がる山岳地帯はそのまま深い山の中に繋がっていますから、余所者には分からない歴史が語られていたりもするものですよ。あなたはお優しいと見える。人の痛みも分かるでしょう。どうか土地を大切に守って来た人達の気持ちに寄り添って大きな仕事をするのですな」

じっと見つめるスーツの紳士。忠徳は圧倒されながら聞いていたが、そうする内に列車は鬼怒川の河川敷を渡り切り、薄暗い切り通しの続く丘陵地帯に差し掛かっていた。いよいよ窓の外も暗くなり、オレンジ色の灯がともる薄暗い車内に玲子の白い着物が引き立っていた。

「お嬢さん、この青年は良い人だ。しっかり手を離さないで行きなさい。そしてあなたも、きちんとしたご両親に育てられたのではないですか」

「いえそんな…。祖父、父と海軍でしたが、栃木県で海軍に入る人は少なかったようで、郷里では浮いていたようなのです。祖父も父も曲がったことだけはしない、という人でした。母は優しい人でしたが、私が小さい頃から病がちで…最期は岡本の療養所におりました」

「ほう、それは…。先の戦争では本当にたくさんの方が亡くなりました。栄養失調で病を得た人もいる、戦後の混乱期に命を落とした人も多い。その上最近までまた朝鮮半島で戦争をやっていましたからなあ…」

父が朝鮮半島への徴発で逝った、とは言わなかったが、玲子はこくりとこうべを振った。

「でもまあ悪いことばかり思い出しても仕方がない、最近では大陸から引き揚げて来た陸軍の者たちが、宇都宮で新しい商売を始めているらしいですよ？」

「と言いますと？」忠徳が乗り出した。

「何でも“ギョーザ”、とか言ってね。小麦粉の皮で包んだ饅頭の一種のようなものらしいのだけれど、これがなかなか美味しいそうで。店が増えているらしいのですよ。そうやって新たな食文化が取り入れられるというのも、何とも因果なもの、これも殺戮と戦争の歴史の裏側の一コマを見ているのかもしれないなあ…」

「ギョーザ、ですって。忠徳さん、私も一度食べに行ってみたいわ」

「え、本当ですか？今日は僕も準備があるので、ちょっと良い和食でもと…」

「ははは、お兄さん良いじゃないですか。今日は歳末の締めにはほかほかのギョーザっていうのも、案外ありかもしれませんよ!？」

ちょっと小綺麗な料亭でもご飯を…と考えていた忠徳は戸惑ったが、それでもギョーザなる未知の食べ物に目を輝かせている玲子を愛らしいと思った。

「間もなく徳次郎、徳次郎です。宇都宮日光線はお乗り換えです」

先程後ろの車掌へ移って行った車掌が声を張り上げながら廊下を戻って来る。列車は少しずつ減速すると徳次郎駅の外れにあるプラットフォームに横付けになった。いつしか藍色の空に包まれた乗り換えの停車場に佇む、内からオレンジ色に輝くダブルルーフの木造客車。

「それでは今日はこれで。私は明日の仕事があって、日光の方に向かうのでね。どうか、お二人お幸せに！」スーツの紳士は下りホームへと乗り換えて行った。

「ねえ、ギョーザって、どんな感じかしら？饅頭みたいな、というお話でしたけれど、お味はどう違うのかしら？」

「そうですねえ、僕も皆目見当が付きません。でも、玲子さんと一緒ならきっと美味しいと思いますよ」

「まあ…！」



良いじゃないか。国立天文台に勤める父を失って流転を重ねた自分も、両親を失って伯母の許に身を寄せた玲子も、もう十分に頑張ったではないか。これからは自分たちの時代だ。自分たちが幸せを築く時代なんだ。この国もきっと豊かになっていく。舶来…なんて格好良いものではないかもしれないが、そのギョーザとかいう物珍しい饅頭も、二人で試してみようじゃないか。まだ見ぬ“ギョーザ”がちょっと楽しみになって来た忠徳が線路の日光方を見遣ると、新たな時代を取り入れたような丸みを帯びた意匠のキハ九十系快速列車がそのどことなく剽軽な面を見せて砂利敷きのプラットフォームに滑り込んで来る。

「ねえ、忠徳さん、ギョーザって、もしかしてあんな形なのかしら」玲子がいたずらっぽく言う。

可笑しなことを云うな、と思わず笑ってしまった忠徳であったが、言われてみるとどこか新種の饅頭のように見えなくもないキハ九十系に、忠徳は得も言われぬ愛おしさを覚えたのだった。